

支える側から育むキャリア教育 ～発達に課題のある子の支援者に目を向けて～

令和7年度山形県教育センター長期研修生（12か月）

1 研究のねらい

令和の日本型学校教育において、個々の強みを活かし自己決定を促すキャリア教育の重要性が高まっている。本校でも自立活動を中心に、子どもが自ら選択する場面を大切にしてきた。一方で、特別支援学級の担任として、将来への不安を一人で抱え込む保護者の姿も多く見てきた。孤立を深めた結果、子どもの「苦手の克服」にのみ意識が向いてしまうケースもあった。この背景には、発達に課題のある子どもの進路情報が届きにくいことや、同じ悩みを持つ保護者同士が気軽に交流できる場が不足していることなどが考えられた。

苦手の克服のみを求めている、学びの楽しさには出合えない。自分の強みに気づき、それを大切にできこそ、特性による困難と向き合う力が育つのではないか。そのためには、学校と家庭、そして保護者同士が対等な立場で思いを共有し、共に考える協働的な対話が必要であると考え、本研究テーマを設定した。問いや気づきを持ち寄りながら、相手に寄り添う対話を重ねることで、子どもを支える大人としての視点を広げ、子どもへのまなざしや関わり方を深めることを目的としている。

2 研究の方法

- (1) 文献研究（キャリア教育・保護者支援の意義）
- (2) 調査研究（視察・聞き取り・アンケート）
- (3) 実践研究（ゆるり通信・ゆるりカフェ・支援学級の担任団との対話）

3 調査研究

高校・特別支援学校への聞き取りから、発達に課題のある子どもが卒業後に直面する「自己理解の弱さ」が明らかになった。また、自己理解はキャリア教育の基盤であり、その育成には土台となる自己肯定感を高めることが不可欠であることも見えてきた。

4 実践研究

保護者が自分に合う方法で、安心して心からの対話ができるよう、紙面と対面の2種類の場を設定した。

- (1) 紙面上の協働的対話「ゆるり通信」の発行

ア	子育てアイデア集 アンケートで得た支援例をパンフレット形式に集約。専門書とは異なる「仲間による体験談」の共有に価値を置いて配付した。
イ	絵本「立ち直る力」 レジリエンスに関する保護者の体験談を構成。「子どもにとって、レジリエンスの源は母親である」との知見も盛り込み、支援者自身の自己肯定感を高める一助とした。
ウ	高校選択のポイント 「本人・保護者・双方の役割」の3視点で整理。通学体験や合理的配慮に関する申し出の重要性、将来の社会自立に向けた見通し等を示した。

エ	学校生活お役立ちガイド 保護者が「少し先の未来」を思い描けるよう、4つの校種の協力を得て作成。各校のサポート体制、生徒へのインタビューなどを掲載した。
オ	就労支援機関の紹介 療育手帳の有無に関わらず、発達段階に応じて利用できる支援機関や相談窓口等を整理し、紹介した。

〈考察〉

紙面を介した対話により、保護者の不安が安心へと変わり、主体的な行動が引き出された。「高校選択のポイント」の発信に対し、「合理的配慮が合否に影響しないと知り、心が軽くなった」との声が寄せられ、これを機に「調理師になるためには?」「相談会への複数回参加は可能か」など、より具体的な問いが増えた。自ら情報を求め、将来を考える主体的な姿勢が芽生えている。また、仲間の体験談を編んだ「子育てアイデア集」や「絵本」の作成は、孤立感の解消に加え、仲間の知恵が循環するサイクルを生み出した。子の特性を強みと捉え直す視点も育まれ、保護者の自己肯定感の高まりにつながったと言える。

- (2) 対面上の協働的対話「ゆるりカフェ」の開催
〈上段は内容、下段は保護者の変容〉全2回

7 /	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書貸し出し ・ 療育グッズ作り ・ 先輩母との対話 等
11	進路に悩む保護者が、対話や掲示物を通して「本人の意思や強みを尊重し応援する」という姿勢に転換した。また、会場の本をきっかけに諦めていた親子読書に再挑戦したり、スキル本を活用し子どもと一緒に家事に取り組んだりするなど、家庭での関わりが具体的かつ前向きに変化する様子が見られた。
11 /	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就労移行支援事業所の講師による講話 ・ 中、高、特別支援学校教員との対話 等
10	講話から「親自身の前向きな生き方が何より大切」とのメッセージを受け、自ら就労支援を調べたり、講演会へ参加したりする主体的な行動が生まれた。さらに、性教育など語りづらかった不安も共有し始めるなど、対話の輪がより深く広がっている。

〈考察〉

保護者が安心して語り合える場の存在が、子どもへの向き合い方に大きく影響することがわかった。これは思いの言語化により自身を再認識したことや、それを共感的に受け止めてもらえたことで安心感が生じたためだと考えられる。また、対話によりこれまでになく視点にふれたことが、子どもを肯定的に見つめる契機となり、最終的に、保護者自身が自ら課題を乗り越えようとするエネルギーを生み出したと捉えている。

(3) 特別支援学級担任団との対話

ア「ゆるりカフェ」の継続に向けた意識の共有

保護者からの「担任の先生にも参加してほしい」という要望を受け、担任団による対話の場を設けた。来年度の継続について意見を出し合ったところ、全員が「カフェを続けたい」という思いで一致した。

一方で、若手教師からは、自身の緊張が保護者に伝わってしまう不安や、教師が参加することでカフェの柔らかな雰囲気が増えることへの懸念が示された。

そこで、改めて原点に立ち返り、その価値を再定義した。教員にとっては、保護者の「生の声」から支援のヒントを得る貴重な機会となり、保護者にとっては、対話を通じて悩みの捉え方を変容させ自己肯定感を高めるとともに、適切な情報提供により将来への不安を解消する場としての意義がある。

さらに、形式にとらわれない対話は、互いの存在を認め合う関係性を育み、孤立感を解消する力を持つ。こうした検討を経て、場の緊張を和らげ、参加者が自然体で集える環境を構築するために最も重要なのは「相手の話に耳を傾ける姿勢」であるとの結論に至った。

これらを踏まえ、「ゆるりカフェ」の核を「寄り添い」と定め、担任団がチームとして参画できるよう体制を整備した。その内容が、下記にあるプラン編とコンセプト編である。「寄り添い」とは、相手を傷つけず思いを受け止める「ケア」【※1】の視点であり、この心の安定が自己肯定感の土台となる。これにより、保護者が面談等の「セラピー」【※2】の段階で課題と深く向き合うことが可能になると考えた。また、教師と保護者が安心して関わり合える場を創出するとともに、若手教師がベテランの知見を継承する「学びの場」としての機能も重視した。今後も「寄り添いが保護者の自己肯定感の高まりにつながっているか」という原点に立ち返り、内容を更新し続けながら実践を深めていく。

【プラン編】(運営面)

- ・年度当初の参観日に、支援学級教室で実施
- ・座席配置：
1 テーブル 2~6 名
→「縦のつながり」(若手・ベテラン教員、1年・6年保護者)を活かす
- ・保護者のみの「ミニカフェ」も検討
- ・アンケートによるニーズの把握

【コンセプト編】(姿勢等)

- ・寄り添い＝「ケア」
- ・主役は保護者
→子どもの話から入らず、保護者の思いを聴く
- ・横並びの関係
→「教える／教えられる」を脱する
- ・共感の重視
→うなずき、笑顔
- ・安心を支える言葉
→「大丈夫」を意識的に使う

イ 若手教員の専門性向上を目指した OJT

対話を重ねる中で、教員もまた悩みながら児童や保護者に向き合っている現状が見えてきた。特に若手教員が一人で苦戦する姿があり、教員自身が安心して学べる環境構築が不可欠であると考えた。そこで、若手教員を支えながら組織的な支援体制を整えるため、現場で即活用できる2つのツールを作成した。

ア	<p>自立活動オリエンテーションスライド</p> <p>自立活動の学習を始める際、授業で子どもと共に活用するツールとして作成した。基本的な視点を示しつつ、教員がアレンジできる「余白」を残した構成にしている。授業を構想するプロセスそのものが、教員の「個に応じた支援」への思考を深め、専門性の向上につながると考えたためである。</p> <p>→若手教員による授業実践を通じ、「子どもと個別に向き合う大切さを感じた」「自己決定を促す選択肢の引き出しを増やしたい」等の手応えを得ることができた。また、授業を参観する中で、教師自身の新たな強みを発見することができた。こうした魅力を共有し、支援する側の肯定感を高めていくことは、子どもへの支援をより豊かにしていくために欠かせない視点であると感じている。</p>
イ	<p>保護者面談用スライド</p> <p>年度当初の面談において、保護者と共に活用するツールとして作成した。学校と家庭が「一つのチーム」として信頼で結ばれることを目的としている。担任が「子どものよさ」を自らの言葉で語るステップを組み込むことで、担任自身の児童理解を促すと同時に、保護者への問いかけを通して、双方が歩調を合わせて子どもを肯定的に見つめる姿勢を育む構成とした。</p>

4 研究のまとめ

本研究を通して、「支援者の自己肯定感」こそが、発達に課題を抱える子どものキャリア教育において重要であることを確信した。支援する側が、対等な立場で悩みや弱さを分かち合える「協働的対話」によって心のゆとりを取り戻すことは、子どもに前向きに関わる姿勢へとつながり、子ども自身が自分らしさを発揮する原動力となる。

また、本研究は、私自身の「自立」の捉え方にも大きな変化をもたらした。本来の自立とは「一人で頑張ること」ではなく、必要な時に「助けて」と言える力であり、周囲と支え合う循環の中で育まれるものである。障がいの有無に関わらず、できないことを誰かに頼ることは自然なことであり、その意識をもてた時、人はより生きやすく、前向きになれる。

「子どもを誰一人取り残さない」と同じように、支援する側もまた取り残されてはならない存在である。子どもたちの未来を支える基盤として、これからも「協働的対話の場」の創出に挑み続けていきたい。

【※1】ケア…周りが相談者を支える行為。ありのままを受容する。

【※2】セラピー…相談者が現実と向き合い、自立を目指す行為。

5 調査研究協力

(1) 聞き取り調査へのご協力

- ・中山町立中山中学校
- ・山形県立上山高等養護学校
- ・山形県立村山特別支援学校
- ・山形県立米沢養護学校
- ・山形県立左沢高等学校
- ・山形県立霞城学園高等学校（定時制）
- ・山形県立寒河江工業高等学校
- ・山形城北高等学校
- ・慍山高等学校（通信制）
- ・創学館高等学校
- ・東海大学山形高等学校
- ・日本大学山形高等学校
- ・山形県発達障がい者支援センター
- ・やまがた法務少年支援センター
- ・やまがた若者サポートステーション
- ・(株) チャレンジドジャパン
- ・保護者サロン「おしゃべり広場ラコールカフェ」
- ・一般企業就労者（障がい者雇用・40代女性）

(2) アンケートへのご協力

- ・本校特別支援学級保護者

6 引用・参考文献

- ・文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編」開隆堂
- ・文部科学省（2018）「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編」開隆堂
- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」開隆堂
- ・文部科学省中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」
- ・山形県教育センター（2025）「特別支援学級ハンドブックー令和7年度版ー」
- ・山内康彦（2021）「特別支援が必要な子どもの進路の話」WAVE 出版
- ・山内康彦（2023）「特別支援が必要な子どもの「就労」「進学」「進路」相談室」WAVE 出版
- ・山内康彦（2024）「特別支援が必要な子どもの高等学校進学の話」WAVE 出版
- ・岩瀬利郎（2022）「発達障害の人が見ている世界」アスコム
- ・松永正訓（2023）「発達障害に生まれて」中央公論新社
- ・東田直樹（2007）「自閉症の僕が跳びはねる理由」エスコアール
- ・島谷千春（2025）「BE THE PLAYER」(株)教育開発研究所
- ・司馬理英子（2020）「ADHDの本」主婦の友社
- ・増田謙太郎（2020）「特別支援教育コーディネーターの仕事術100」明治図書出版
- ・諸富祥彦（2023）「特別支援と愛着の問題に生かすカウンセリング」ぎょうせい
- ・清水浩（2018）「特別支援学校のキャリア教育」田研出版
- ・本多和子（2018）「『何度言ったらわかるの？を『できた』に変える上手な伝え方』学研教育みらい
- ・藤堂栄子（2016）「ディスレクシアでも活躍できる働き方」ぶどう社
- ・木村順（2010）「発達障害の子の感覚遊び・運動遊び」講談社
- ・本田秀夫（2023）「マンガでわかる 発達障害の子ども達」(株)SBクリエイティブ
- ・小道モコ（2009）「あたし研究ー自閉症スペクトラム～小道モコの場合」(株)クリエイツかもがわ
- ・小道モコ（2013）「あたし研究2ー自閉症スペクトラム～小道モコの場合」(株)クリエイツかもがわ
- ・河内美恵（2025）「現場で役立つ！保育者のためのペアレント・トレーニング」(株)世界文化ワンダーグループ
- ・西剛志（2023）「『やりたいこと』の見つけ方」(株)PHP 研究所
- ・黒沢幸子・渡辺友香（2025）「教育相談ですぐ使える！解決志向ワークシート」(株)本の森出版
- ・東畑開人（2024）「雨の日の心理学 こころのケアがはじまったら」(株)KADOKAWA
- ・久世浩司（2015）「マンガでやさしくわかるレジリエンス」日本能率協会マネジメントセンター
- ・小林朋子（2025）「立ち直る力を育てる本」(株)ナツメ社
- ・足立啓美（2020）「きみのところをつよくするえほん」(株)主婦の友社
- ・足立啓美（2022）「きみのいいところがみつかるえほん」(株)主婦の友社
- ・末永幸歩（2020）「13歳からのアート思考」ダイヤモンド社
- ・本田恵子（2025）「にぼしとかつおのこころあんしん絵本」(株)ポプラ社
- ・齋藤孝（2025）「きみのところをつよくする くちぐせえほん」(株)日本図書センター
- ・オーレリー・シアン・ショウ・シーヌ（2019）「おこりたくなったらやってみて」(株)主婦の友社
- ・オーレリー・シアン・ショウ・シーヌ（2022）「かってもまけてもいいんだよ」(株)主婦の友社
- ・オーレリー・シアン・ショウ・シーヌ（2024）「しっぱいしたっていいんだよ」(株)主婦の友社
- ・西木めい（2024）「発達障害のある子を支える担任と保護者の連携ガイド」(株)明治図書